
災害の経過と博物館学教育

—熊本地震から1年が経過して、隣接した地域は災害をどの様に考えるべきか—

The course of disaster and museum study education.

—One year after the Kumamoto earthquake, how neighborhoods should consider disasters.—

山内 利秋

Toshiaki, Yamauchi

Abstract

One year has passed since the Kumamoto earthquake 2016, even now in the afflicted areas it will continue to be difficult. On the other hand, it is highly possible that disasters have already been forgotten in the surrounding area. I feel a sense of crisis as a preparation for future large-scale disasters.

Therefore, we conducted a large-scale disaster, especially the exhibition on the theme of "shelter problem" in educational activities. By doing this, students who are responsible for the local community in the future are aiming to be able to train them as human resources who are aware of the upcoming large-scale disasters.

キーワード

博物館・博物館学・学芸員養成・災害・熊本地震・防災教育

1: はじめに

熊本地震から1年以上が経過し、なおも被災地では困難が引き続いているものの、それが九州の他県における大規模な災害に対する警鐘として、どれだけ危機意識を保っていけるのだろうかという不安がある^{*}。残念ながら、被災地である熊本・大分両県に隣接している地域であるはずの宮崎県においては、既に「他所で起きた過去の事」として理解されてしまっているのではないかという心配がある。

このような危惧が間違いではないと理解するのは、特に将来の大規模災害に直面するかもしれない学生達の様子をうかがうに、強く認識する事でもある。すなわち、災害からの生存を意識する機会と、生き延びるという事を支える知識・技術を学習する機会が極端に不足している結果、大学を卒業後に社会人として

※ただし実習での企画展示期間と前後して九州北部豪雨が発生した(平成二十九年七月五〜六日)。この出来事は大規模地震災害への対応を学習している受講生にとっては、別の種類の災害の存在をも認識し、考えていく必要性が高い事を意識させたのは間違いない。

自らの生活している社会に対して防滅災に関わるアプローチをかけていく事など望むべくもない。

このままでは再び「よもや自分の所に災害が発生するとは思わなかった」という言葉を、土地の人々に吐露させる結果となりかねないとも考えてしまうのでもある。そこで昨年度に引き続き、平成 29 年度も「大規模災害」を大テーマとした企画展示を博物館学内実習で継続していく事とした。

昨、平成 28 年度の学内実習では大規模災害発生直後の問題、すなわち「いかに逃げるか」が大きかったが、今年度は逃げた後の時間経過にあたる「避難所」で発生する様々な問題を扱った。例年この授業を通じて難しく感じるのは、ノウハウや意識の継続性である。先輩が経験した課題を後輩が継承していく事は難しい。しかし、地震のみならず近年多発する大規模災害に対していつまでも「何も出来ない」のではなく、災害被災地から得られた様々な経験、そして、生存のためには欠かせない情報や技術・知識を理解し、それを広く周知化しようとする意志を醸成していく活動は、これから社会の中で生きていく若い学生にとって大きな要素となるに相違ない。

この事を当の学生自身に強く意識させるには、やはり大きな災害が発生してまだ遠くない時間経過にある今しか経験出来ないと理解している。

2: 被災地の状況はなかなかわからない

では災害を大きなテーマとし、前年度とは異なった内容の企画を構築していくにあたって、一体どのような具体性を持った議論と準備を進めていけるのだろうか。しかし、これまでも繰り返し述べてきたがあくまでもそうした論点は科目を履修している受講生達の中で考えていくべき点であって、教員はそれを見守るか、議論の進行を促すしかない。

結局の所、例年と同じく学生間の議論の繰り返しの中で企画を創出するという手続きを行ってみたが、どうしても「おおざっぱ」な内容に終始してしまう傾向からは逃れられなかった。議論を数週間にわたって進めていく際の準備不足—すなわち、受講生はこの授業の最初の回までに十分な予習を積んできている訳ではなく、また授業回初期になっても授業時以外には内容に取りかかろうとしない—や、この博物館実習を履修する以前の表現のトレーニング機会の不徹底がある。筆者が本学で直接関わっているメディアリテラシー系をはじめとする基礎科目や、他の教員が従事する PBL 科目といった課題解決を目指した科目が存在しても、主専攻たる分野の性質上どうしても「覚える」要素が重視されなくてはならず、そして学部教育においてはそのためのトレーニングを繰り返していく事を欠かす訳にはいかない。従って博物館領域において必要な「表現」に早い段階から取り掛かる機会は、この博物館実習以前には少ない。ただこれは表現を日常的に訓練する分野（例えば芸術系の大学）以外の大学では等しく近い事が言えるのかもしれない。

それと、これは筆者自身を感じる事でもあるが、学生が積極的に外部へ出て

※「避難所」を受講生達に認識させたのは、筆者が国立民族学博物館での企画展『津波を越えて生きる―大槌町の奮闘の記録』(会期…平成二十九年一月十九日～四月十一日)、東京臨海広域防災公園の防災学習施設「そなエリア東京」のそれぞれの展示を彼らに紹介した、という点はあるだろう。

いこうとする機運がなければ、限られた地域社会の中で生活していると興味関心の範囲がどうしても狭くなり勝ちになってしまっている。スマートフォンで必要な情報は即座に検索出来る時代とは言え、必ずしも大学生一般のメディアリテラシーは高いとは言えない。一つには語彙力の少なさが検索の範囲を決定付けていると言ってもよいのかもしれないが、生活力のない大学生はアリアダプターには中々成り得ず、受け身であっても外部的な刺激を情報として享受出来ない、広い観点から地域社会の課題解決にも結び付けられる知識・技術の習得とその集約化をはかり、暗黙知として機能させていくのは到底難しい。そう考えると、災害・防滅災に関わる外部的な刺激が学生の生活圏からはどうしても希薄なのだと理解出来る。

実際には熊本地震被災地出身である受講生もおり、自宅や家族・親族等が被災している者もいる訳であるのだが、たとえそういう条件にある者がいても、学生生活の日常からは被災地の状況を理解するという事を積極的には行い得てはいないのがよく理解出来た。

こうした中にありながらも、彼ら受講生の中から出てきた「避難所の課題」を取り上げるというアイデアは(図1)、テーマとしては決して悪くはないし、直接的な避難の次の段階に注目すると捉えるならば、むしろ妥当な理解であるとも言えよう※。ここには、指導を行った筆者の大きな見込み違い(いい意味での)があったとしか言いようがない。

3: 視点をつむぐ

何を伝えるか、どのように効果的に訴えていくべきか、といった試行錯誤の存在は博物館における企画活動では欠かす事が出来ないが、この様々な表現方法の模索は受講生にとって大変困難であるものの、後の結果につながるアクティビティとして彼ら彼女らが自らを振り返りやすいものであると考えている。限られた期間内に、それまで全く考えた事もなかったテーマを具象化していく事で、大きなアイデアを現時点での自分の実力と照らし合わせながらその実現可能性を勘案していく。教員の立場から鑑みて、より望ましいと考えられるのは受講生が実力よりも少し外側にアイデアを拡張していく事、言ってみればはみ出した程度の「塗り足し」を狙うのが丁度良いのかもしれない。

例年、展示会場として場所を借りているのは延岡市内の延岡市民協働まち



図1: 平成29年度企画展示ポスター

づくりセンターであるが、本年度は同センターが他の企画と重なったため、カルチャープラザのべおかのギャラリーを借りる事とした。この会場はもともと市民向けギャラリーとして建設されたので展示会場としては悪くはないのだが、設計思想の時間経過もあるのか使い勝手が悪かったり、公表されている利用情報が極めて限られていて、要領を得ない市民にとっては混乱を招きやすい。大規模災害時にこの場所も避難所になる可能性を考えた場合、施設管理がこれではどうなのだろうとも考えるのだが、案の定、受講生（そしてたまにここを利用する筆者も）達が会場を確認する際に混乱があり、会場運営者にも迷惑をかけてしまった。

具体的な「アイデア出し」を経て、出てきたアイデアを接合・分離していく作業は毎回の産みの苦しみであり、そしてこうした作業経験のみならず、社会的経験そのものが限られている年齢層にある受講生にとっては、自分達の先輩が完成させた前年度までの到達点を踏み台にしながらその上を目指す所までにはなかなか達しない。限られた知識量の中では毎年度同じ所で躓き、最終的に出てきた提案も過去と類似したデザインにとどまってしまうのが例年である。

東日本大震災以降の今日においては、避難生活の困難さを物語り、そうした経験を経て開発・改良されてきた様々なアイデアやモノに関わる情報を様々な所で見つけ出す事は比較的容易である。むしろ簡単に見出される情報こそが、災害から生き残る上では有益ともなり得るのだ。もちろんインターネット上の知識として知ると、それを実際に自分達で作りに出して疑似的ながら体験してみるのとでは大きな差がある訳で、これを再現し、多くの人々に理解されるように展示していく重要性は高い。

受講生が拾い上げたのは避難所という非日常的な場でありながらもそこで繰り返される日常の中で生じる課題であり、「知る事」と「体験する事」の差が大きなトピックであった。具体的にそれは、トイレの問題やペットの同行避難、避難スペースの確保や携帯電話の充電、食糧の調達と調理、障害者・高齢者の課題、そして女性に関わる様々な課題といったものであった。展示会場各コーナーの仕切りには避難物資をイメージしてダンボール箱を積み重ねて付置した事で、来場者のイメージ喚起を助けた。



写真 1:
空き缶を使って米を炊く実験の様子。

写真 2:

ペットボトルにはヒトが一日に使う分量・一回のトイレで使用する分量の水がそれぞれ入れられている。



「空き缶を使って米を炊く」

空き缶をくり抜き、ロウソクで火をつけて上部には同じく横に半裁した空き缶の中に米と水を入れて炊けるかどうかを確認。火力や時間を調節すれば実際に炊き上がり、美味しく食べられる事を確認した(写真 1)。

「避難所におけるトイレ問題」

避難所では水が止まるのでトイレが流せなくなり、衛生問題が発生する。我々が一回に一般のトイレで流す水の量をペットボトルに水を入れたオブジェとして表現し(写真 2)、さらに市販されている仮設トイレを紹介した。

「ペットの同行避難」

ペットは今やかけがいのない家族として扱われており、避難所にペットを同行出来たかどうかは被災者の心の問題に大きく関わってくる。ただ、もちろん避難所によってペットを連れてこられる所とそうではない所があり、同行(同伴ではなく)した場合でも他の被災者に迷惑をかけない事の必要性がある点を訴えた。等身大の小型犬のオブジェを巻き段ボールを使って制作し、ペット管理のためのマイクロチップの紹介・実演を行った。

「高齢者・障害者の課題」

高齢者・障害者には日常的な健康管理や生活上の課題があるが、避難所という条件ではそれがさらに生命の危機に直結する重篤な問題となる可能性もある。高齢者の体験キット(高齢者の身体的な不便さを理解する疑似体験教材)を用意し、問題を取り上げた。

記録として遺されている実際に災害避難所で書かれていた内容を元に掲示板を再現し(写真 3)、これを視力低下や白内障等によって視覚障害がある高齢者がどれだけ読み取れるのか、重く不自由な身体での移動がどれだけ不便なものか、実際に体験した来場者からは「ため息」が聞こえる程の驚きがあった。

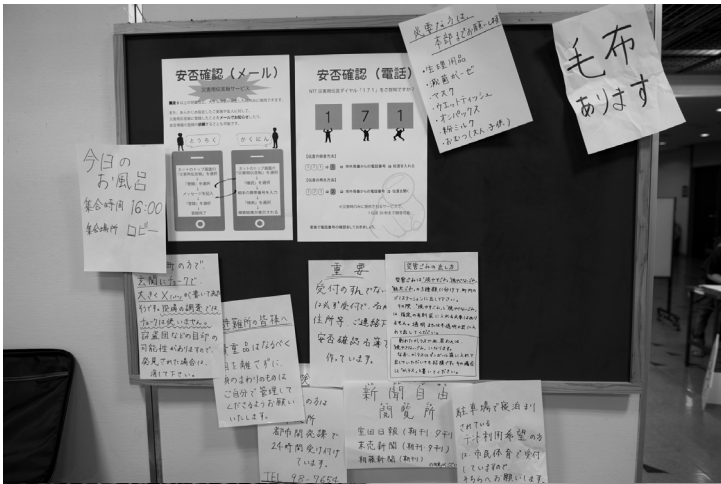
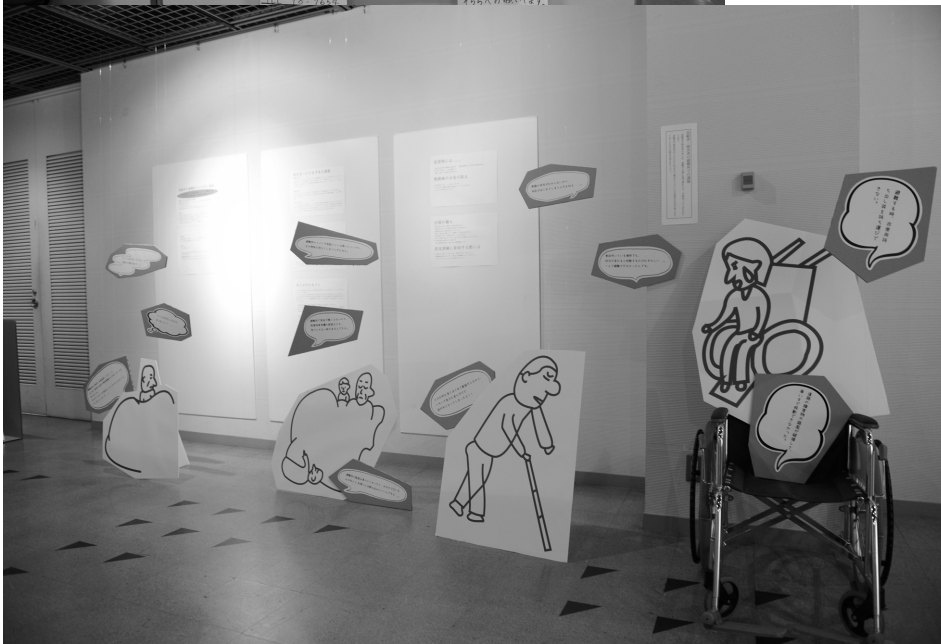


写真3:

上から、a. 再現された避難所の掲示板。記録として遺されている中越地震や東日本大震災で掲示された内容を再現している。b. 高齢者・障害者の避難所での困難さを物語る展示。



「避難スペースを再現する」

体育館等の避難所での長期間の避難生活では、プライバシーの問題が大きくなる。近年ではパーソナルスペースの確保から、簡単ながら機能的な仕切りが多く提案され、災害避難所で利用されている。展示では板段ボールを使



写真4:

避難所でのパーソナルスペースの再現。これによって最低限の個人のプライバシーが確保される。

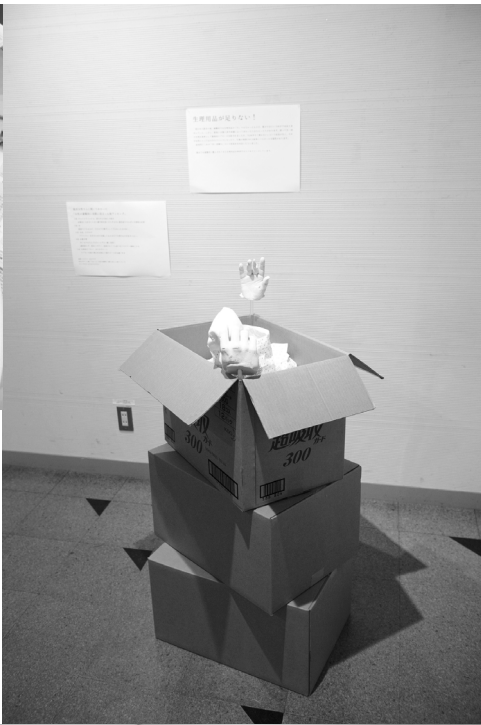
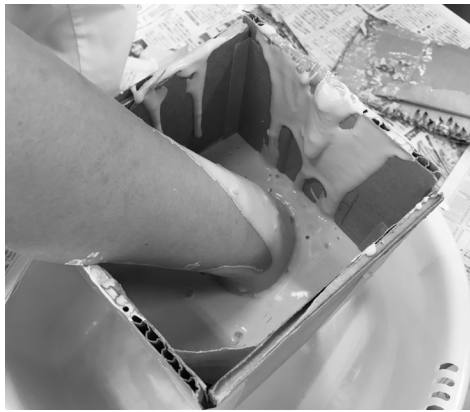
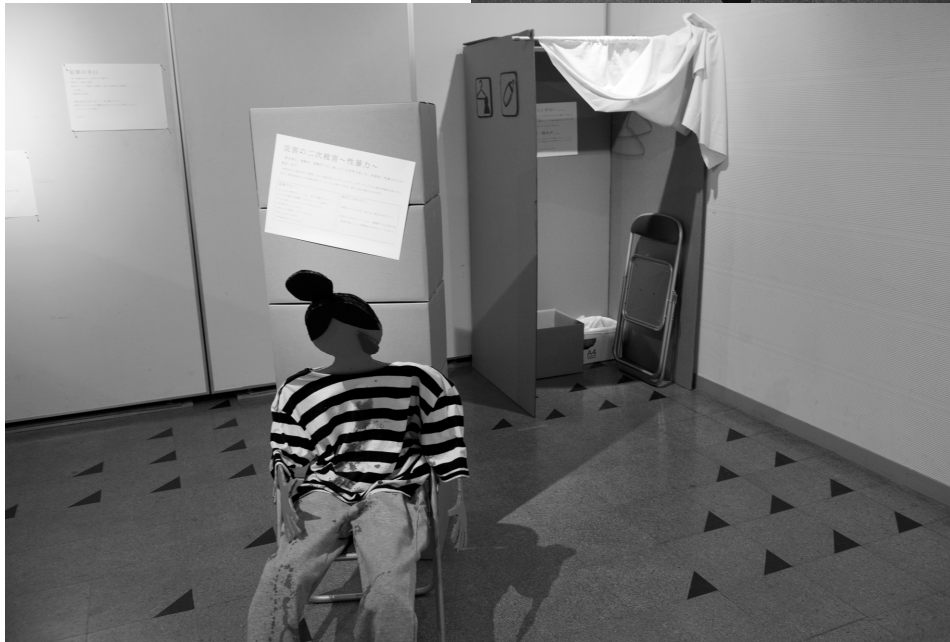


写真 5:

上から時計回りに、a. シリコンを使って手の型を取る。b. 生理用品の確保の問題を物語るオブジェ。c. 女性に対する性犯罪(前)と着替えスペース(後)を表現している。



用して仕切りを作成し、さらにそこで一次生活を送る人々の様子を再現してみた(写真4)。また、現在では携帯電話が欠かす事は出来ないが、避難所では充電可能な電源に多くの携帯電話が集中する。その様子も再現してみた。

「女性に関わる様々な問題」

災害避難所はどうしても男性目線で構築されがちであり、特にこの事は女性に対する社会的位置付けが都会と比較して未だに低い地方においては重篤な問題が生じる可能性がある。そこで、着替え場所や生理用品の確保の問題、さらには性犯罪の可能性にも言及した。これらは担当した学生自身が型取りを行い、イメージを喚起させるオブジェとして再現した(写真5)。結果、ショッ



写真 6:

上から、a. 大好評だった防災カードゲーム。津波発生から避難、火災発生から消火といった様々なシチュエーションにおいて、どのような判断をとるべきか順を追って考える事が出来る。b. 延岡市内の津波ハザードマップを拡大展示した。市民には意外と知られていない事がわかった。

キングなものではあったが、多くの来場者に影響を与えたと考えている。

「防災カードゲーム等」

主たる展示以外にも、これも担当者を決め毎年度行っているが、教育普及を目的としたコーナーも設置した(写真6)。ここでは災害からの避難プロセスをカードゲームを使って考えていくもので、大人向けと子供向けを用意した。このゲームは大変好評で、展示終了後に延岡市危機管理室からの依頼で同市防災フェアにも出展している。また伝承として伝えられている災害時における動物の異変、拡大したハザードマップを展示しながら来場者の自宅等の位置を確認してもらおうといった活動を実施した。以外にも市が発行し、市内全戸に配布しているハザードマップの存在を知らない市民が多かったのに

は驚きがあった。

「避難所での健康管理に関わる ZINE」

例年、企画展会場では展示解説資料を配布しているが、昨年度からは災害時に役立つ内容をまとめた ZINE を作製している。熊本地震では車中泊が問題になった事もあり、受講生自身がモデルとなった簡単に出来るストレッチ体操や伝言サービス等の安否確認方法についてまとめた(図2)。A3サイズ八つ折りの ZINE は大変コンパクトで便利なものであり、実際の災害発生後には役に立つデザインかもしれない。

4: 危機管理に関わる話を聞く。

昨年度は熊本地震の最も大きな被災地の一つであった益城町にて実際の被災地を見、そして被災者の話を聴くという活動を実施した。しかし、今年度はそうした方向性には受講生の議論が向かない。そこで、延岡市危機管理室と相談し、避難・避難所に関わる情報提供を依頼した。ここで提案されたのが防災推進員による出前講座であった。各自治体では防災意識の向上や人材育成・自主防災組織の構築を目的として防災推進員や防災指導員を配置している。多くは自衛隊等で災害派遣の経験があり、実際の災害現場で活動されてきた方が任用されているケースが多い。延岡市の場合は市消防本部にこの防災推進員を配属している。

航空自衛隊員として東日本大震災をはじめ、数々の災害派遣に行かれていた防災推進員の方の話からは、より実態的な経験と、自衛隊出身者らしく極めて現実的・合理的な防災対応がうかがえた(写真7)。スケジュールをなかなか合わせられず、講座を開講して頂いたのは展示開始の直前の時期になってしまっ



写真7: 延岡市防災推進員による出前講座の様子。

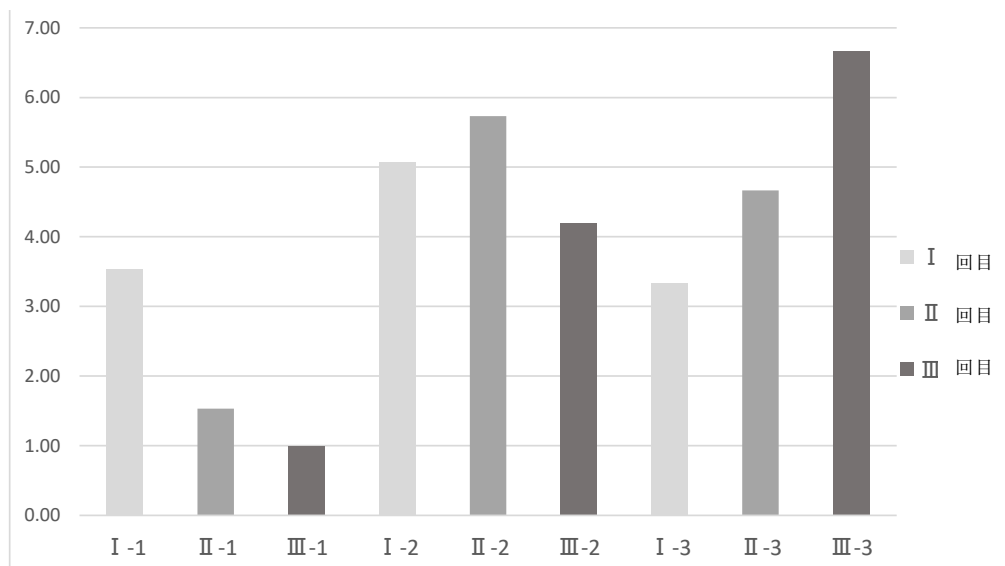


図 3: 受講生の自己評価レベル (平均) の変化

たものの、話の内容は受講生が展示内容を来場者に説明するに際し、裏付けられた知識・情報の提供を可能としたのであった。

また、受講生にとっては、この防災推進員から得た災害・防滅災等に関わるリアルな話こそが、彼ら彼女ら自身がそうした課題を考える上で大きな糧となっていたのは間違いない。

5: 受講生の自己評価と課題

このように平成 29 年度も熊本地震を契機とした展示企画を実施したが、これに対して受講生の反応はどうであったか。

学内実習では総務省による社会人基礎力評価にかかるルーブリック表を活用したパフォーマンス評価を行っている。評価は授業初期・中期・終了期の 3 回に分けて行い、受講生に対して大きく「関心を持って物事に取組む」・「考え抜く力 (思考・判断・表現)」・「チームで働く力」の 3 つの力に関わる 12 の要素を提示し、これを各人が自己評価していく。評価は「発揮できなかった (どうしてもできなかった) レベル 1」・「通常の状況では発揮できた (何とかできた) レベル 2」・「通常の状況で効果的に発揮できたし (見事にできた) レベル 2」・「困難な状況でも発揮できた (とても難しかったが、何とかできた) レベル 3」の 1 ~ 3 (1 が低く、3 が高い) の 3 段階に当てはめる。これを授業初期・中間期・終了期の計 3 回、それぞれ同じ評価表を使って実施・比較していった。

今年度の受講生 15 名の 3 回の評価の平均を、それぞれのレベルの変化から表したものが図 3 である。これによると評価 1 回目ではレベル 1 が高く、2 回目ではレベル 2 が高く、3 回目になるとレベル 3 が高くなっているのがわかる。受講生が記載した個別の内容についてはさらなる分析が必要ではあるが、受講生による自分自身の評価が、学内実習の受講回数を経るに従ってより高くなっているのは理解出来る。

ただ教員の視点からみると、今年度の学内実習にはいくつか課題が残った。特に受講生が例年より多かった事によって、チームに参加する1人1人の役割感が減少してしまい、どうしても個々人の関与が低くなる傾向がみられた。そして関与する作業量は決して均等に分散する訳ではなく、意識的に参加度を下げる「手抜き」が発生してしまいがちになる。この結果反対に特定の人員の負担が大きくなり、学生間に不平等・不公平感が生じやすく、例年には見られなかった学生間の軋轢が生じていたのも、また事実である。こうした課題は今後改善していかなければいけないだろう。

何よりも学内実習での企画展示に参加した受講生らが、将来発生しうる大規模災害時において、地域社会を構成する一員として高い意識を持ち、何らかの役割を担ってくれるようになる事を期待したい。